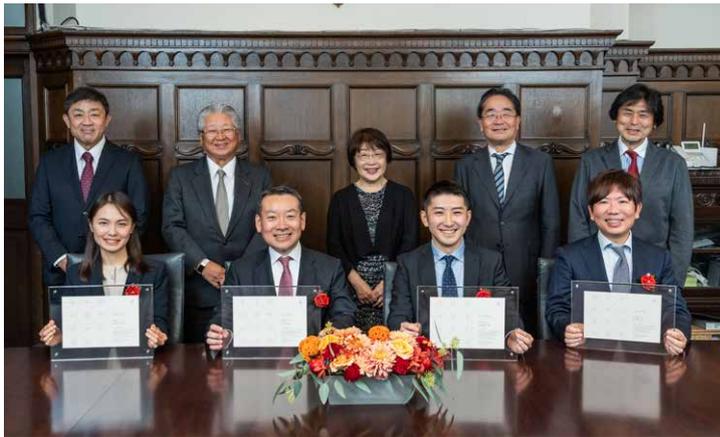


第21回「助成研究吉田秀雄賞」受賞研究が決定

当財団は第21回「助成研究吉田秀雄賞」の受賞研究を決定いたしました。本賞は、「広告・広報・メディアを中心とするマーケティングおよびコミュニケーション」に関する研究助成事業の成果の中から優れた研究を顕彰するものです。選考委員会(選考委員長・嶋村和恵早稲田大学教授)による厳正な審査の結果、2022年度に当財団が助成した研究成果(常勤研究者の部8件、大学院生の部6件)の中から、下記の方々が受賞されました。

贈賞式は、吉田秀雄の誕生日である11月9日に当財団で開催しました。



受賞者の方々(前列)とともに、当財団スタッフと選考委員長の嶋村和恵氏(後列中央)。写真撮影：すべて後藤秀二



左から：当財団理事長、受賞者の原泰史氏、田頭拓己氏、松井剛氏、松井彩子氏



賞状を受け取る代表研究者の田頭氏

〔常勤研究者の部〕

奨励賞
(副賞10万円)

『ソーシャルメディアにおける炎上、購買行動と企業対応に関する理論・実証的研究』

〔代表研究者〕

田頭 拓己

一橋大学大学院経営管理研究科准教授

〔共同研究者〕

松井 剛

一橋大学大学院経営管理研究科教授

原 泰史

神戸大学大学院経営学研究科准教授

松井 彩子

武蔵野大学経営学部専任講師

〔大学院生の部〕 該当なし

*常勤研究者の部の吉田秀雄賞/準吉田秀雄賞は該当なし。大学院生の部の吉田秀雄賞/準吉田秀雄賞/奨励賞は該当なし

知が世の中へ広がるさまを、賞状のモチーフに

"INTELLIGENCE STRUGGLES."をテーマに、「知のものがき」をヤマタノオロチの姿で表現した「吉田秀雄国際学術賞」。それに並ぶ「助成研究吉田秀雄賞」においては、もがいた結果カタチになった「知」が、世の中へ四方八方に広がっていく様子をヴィジュアルアイデンティティ(VI)に落とし込みました。

そして賞状左側に配した模様は、このVIを並べることで構成。研究の成果が、世界に良い連鎖を起こしていくようにと願い、デザインされています。



選考委員長講評

早稲田大学商学大学院教授 嶋村 和恵

2023年9月19日、財団の会議室とオンラインのハイブリッド方式により、助成研究吉田秀雄賞の選考委員会が開催されました。本年度財団に提出された助成研究は常勤研究者の部が8件、大学院生の部が6件の計14件で、このうち予備審査を通過した4件の研究が吉田賞候補となりました。11名の選考委員は候補の研究を約1カ月かけて熟読の上、個々の研究を採点して、委員会に臨みました。

常勤研究者の部では、学術的意義、独創性、インパクトという点から評価します。今回、候補となった2件の研究について、選考委員のポイント評価の合計点、コメント等を参考にしながら、活発な意見交換をした結果、一橋大学の田頭拓己先生を代表とする「ソーシャルメディアにおける炎上、購買行動と企業対応に関する理論・実証的研究(継続研究)」を奨励賞に決定しました。

この研究は、ソーシャルネットの利用が日常化する中で、広告を含めた企業活動が取り上げられる機会が増え、時に大きな炎上が起きて、ネット以外のメディアでも話題になっていることを背景に、①これまでの研究潮流、②日本における炎上の動向、③炎上特性が消費者行動へ与える文脈依存効果、④消費者の倫理的意識決定に基づく炎上への反応、⑤ユーモアを動機とした炎上への参加、といった点から多角的にアプローチした意欲的なものです。まさに学術的意義、独創性、インパクトも高いと評価されました。

しかしながら、吉田賞、準吉田賞ではなく奨励賞となった点

については、説明が必要かと思われます。優れた研究であるという意見は多くの選考委員に共通したものの、ではどの賞にふさわしいかという点では意見が分かれました。

大部で力作の報告書ではありますが、章ごとの文体に統一感が欠けているという指摘、むしろ研究テーマを広げすぎたのではないかという指摘もありました。ことに、炎上と購買行動の関係を明らかにするためシナリオを使ったアンケートが行われ、炎上が必ずしも当該企業の製品の購買意図を下げるわけではない、という結果が示されている点に注目が集まりました。「炎上には加担するが、問題となっている企業の製品は買う」という消費者が実際に存在しそうだということは確かに予測できます。しかしながら、財団の助成研究ではやはり健全な広告活動の進展に貢献するもの、倫理的な広告活動を支えるものを褒賞の対象としたいという意見もありました。炎上を起こした企業が、その後取るべきコミュニケーションにまで踏み込んでもらえると、もっと納得感があったかもしれません。

とはいえ、理論・実証の両面から包括的になされた炎上研究ですので、今後さらに発展させていただきたいという選考委員の期待を込めて、奨励賞と致しました。

大学院生の部は、先行研究、独創性、実務応用性、論旨の明確さ、実証手続き、発展性理論貢献という6項目で評価します。今回は残念ながら該当なしとなりました。

常勤研究者の部、大学院生の部共に、今後ますます優れた研究が生まれてくることを期待しています。

Editor's Note

20年前の米のTVドラマ『スターゲイト・アトランティス』は、ワーゲートを使いエネルギーコアと未知の古代先端技術を探る物語。ドローンという名前も、登場する武器で初めて知った。今もエネルギーなしでは生きられない状況は続く、人類の探索と技術開発も続く。本誌による探索は後任に託し、今号で編集長は最後です。ありがとうございました。(傾)

自然エネルギーを知るきっかけとなったのは絵本『パーババパのプレゼント』。パーババパたちが住む寒い地域に贈り物として届いた南国の鳥たちを温めようと、水力、風力、太陽光などで発電にトライ。しかし十分なエネルギーが確保できず、結局、鳥たちを南国に帰すことに。エネルギーの安定供給が難しいことを教えてくれた一冊です。(葡萄)

石油が生物の死骸でできていると知ったのはいつだったか。驚愕しました。同時にそれは、石油資源は有限であること、また燃焼によってCO₂が排出されるという事実を突きつけます。地下資源の乏しさが日本の省エネルギーのドライブとなったように、新しい形のエネルギー分野でも存在感を示してくれるのではないかと期待しています。(ひろた)

エネルギーについてなんとなく知った気になっていましたが、今号の取材を通じて、まだまだ理解が足りないことを実感しました。当たり前のように普通の生活で使用しているエネルギー。自分たちの世代だけでなく、次の世代につながるためにも、もう一度知るところから始めたいと思います(初めての編集後記でした)。(みずさわ)

AD STUDIES 2024年1月25日号 通巻86号
公益財団法人 吉田秀雄記念事業財団
〒104-0061
東京都中央区銀座7-4-17 電通銀座ビル
TEL : 03-3575-1384 FAX : 03-5568-4528
URL : https://www.yhmf.jp

発行人 岩下 幹
編集長 布施博嗣
編集部 岩本紀子、沓掛涼香、小島康平
編集協力 プレジデント社
表紙デザイン 八木義博+藤田将史、中谷晴子(Creative Power Unit)
撮影 片村文人

本文デザイン 南 剛(中曽根デザイン)
校正 株式会社ヴェリタ
印刷・製本 大日本印刷株式会社

©公益財団法人 吉田秀雄記念事業財団
掲載記事・写真の無断転載を禁じます。